

Ludwig van Beethoven
Symphony No.6 in F major
Overture “Egmont”

HR
Hyper-Resolution



Noriaki Kitamura
Slovak Philharmonic Orchestra

Ludwig van Beethoven ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Symphonie Nr. 6 in F-dur “Pastorale” op.68

交響曲 第6番 ヘ長調 「田園」 作品68

《PASTORAL-SINFONIE oder Erinnerung an das Landleben》(mehr Ausdruck der Empfindung als Malerei)

《田園交響曲 あるいは 田舎の生活の思い出》(絵画というよりはむしろ感情の表現)

Angenehme, heitere Empfindungen, welche bei der Ankunft auf dem Lande im Menschen erwachen.

Allegro ma non troppo

第1楽章 田舎に到着した時に、人の心の中に呼び覚まされる、心地よく晴れ晴れとした気持ち。

Szene am Bach. Andante molto moto

第2楽章 小川のそばの情景。

Lustiges Zusammensein der Landleute. Allegro-

第3楽章 田舎の人々の楽しい集い。

Donner. Sturm. -Allegro-

第4楽章 雷。嵐。

Hirtengesang. Wohltätige, mit Dank an die Gottheit verbundene Gefühle nach dem Sturm.

-Allegretto

第5楽章 牧人の歌。嵐の後の、神への感謝と結びついた慈悲深い感情。

Ouvertüre zu Johann Wolfgang von Goethes Trauerspiel “Egmont” op.84

ゲーテの悲劇『エグモント』のための音楽 作品84より〈序曲〉

世界初高品位オーディオ 「Hyper Resolution(超高解像度)」 発売のご挨拶に換えて

今回の企画、初めての打ち合せで、指揮者様から「なにせ良い音で録音して欲しい」との要望。

録音エンジニアはいつでも「良い音」で録音する事を目指している。何を今更って感じだが、これまで最高の機材、最高のスタッフでトライしても自分の聴いてる音をそのままキャプチャ出来ていないと言う。う～む、これは中々手ごわい指揮者様だ。メイクやデフォルメで美しくする事は可能でも演奏そのものの音を聞こえてる状態でキャプチャする事は至難の業だ。(ヘッドフォンでの再生であればダミーヘッドを使用したバイノーラル録音を行えばかなり近い感じで録れるが...)

この指揮者様は困った事に音響に関してもかなり知識が有るようだ。そもそもわざわざスロバキアで録音するのもベートーヴェンがウィーン郊外のハイリゲンシュタットで「田園」を作曲した事や、この地のオーケストラの音色を強く意識しての事だそうで、かの地にて良い演奏を「なにせ良い音で録音して欲しい。」となった訳だ。さらに、「1ビットレコーダーを知っているか?」と。

もちろん知っている。実はもう10年以上、1ビットレコーダーの生みの親、早稲田大学の山崎芳男博士の理工学術院音響研究室の客員研究員をやっている。その間、プロトタイプの1ビット

レコーダーをかついで世界各地でレコーディングをした。空気の気配さえキャプチャする素晴らしいレコーダーだ。クラシックの世界では知らない人はいないと言われるシカゴのストラディバリ・ソサエティでも何度も録音したが録音機は毎回1ビット指定だ。

という経緯で今回の録音は1ビットレコーダーで行う事になった。今や音楽業界では神をも恐れぬ驚異的な音処理能力を誇る「ProTools」が主流。今回の録音場所 (Slovensky rozhlas Studio-1) でも「ProTools」なら録音室にサラウンド仕様で標準装備だが、1ビットとなるとマイクやスタンド以外は全部日本から持って行く。機材の量を考えると2CHの一発録音。マスターレコーダーはMR-2000Sが第一候補だが重量や大きさの点からMR-1000にした。予備を含め2台。(1台は指揮者様の個人所有分を持ってきていただいた) また、この録音室にて何度もスロバキアフィルの録音を行っているGeschwandtner氏と録音ディレクターのNiznansky氏のコンビでも同時に録音を行う。(彼らはProToolsのマルチトラックの標準システム)

まるまる2日間のレコーディング、とても素晴らしい演奏が録れた。現場の生音を誰よりも知っている指揮者先生もご満悦の音。僕も「ほっと胸をなでおろす」が、この先、問題が発生する。

指揮者先生いわく1ビットで録れてる音は良いのにCDにするとさほどでも無い。なんとか1ビット

トのまま出せないか?!

残念ながら1ビットのままだと現状ほとんど編集が出来ない。なにせ演奏時間も長いし人数も多い。誰かがミスしたり、指揮棒を譜面台に当ててでかい音が出てしまうなんてアクシデントもあり、未編集で出す訳にもいかない。先行して発売されたCDは5.6MHz 1bit WSDの2CHデータをKorg Audio Gateで 176.4KHz 24bit PCMに変換してProTools上で編集した。一旦PCMに変換してしまうと「空気の気配」がかなり失われてしまうのだが、そうは言ってもかなりのハイサンプリングレート、CD上の音と比較すれば格段に良い。

後学の為にと、シンタックスジャパン社の試聴室でRMEの最新のDAで試聴させてもらった。コレが中々いけてる!!!...つて事で結局はSACDとPC-Audio盤(176.4KHz 24bit PCM)の2枚組、第二楽章のみだがまったく未編集の5.6MHz 1bit WSDバージョンとワンポイントマイク+MRIで収録したエグモントも同時収録。

秀逸な演奏の同じ素材をCD、SACD、PC-Audio(PCM)、1bitとさまざまなフォーマットで聴く事が出来る。ぜひ「Hyper Resolution」の世界を堪能して欲しい。オーディオファンじゃなくても楽しめる事は間違いない。

Mu- Murakami (Recording Engineer)
<http://www.mu-s.com/>

PC AUDIO & HD AUDIO

弊社は長年にわたりプロ、アマを問わず多くの音楽制作者に高品位なオーディオインターフェイスを販売して来ました。昨今のユーザー登録の状況やお客様の声を聴きますと、かなりの数のユーザー様がPCAUDIO及びCD等の高品位オーディオ音源再生の為にRMEをお買い上げいただいているようです。プロのレコーディングエンジニアから「24/96や24/192で録音された音源をRMEのD/Aで再生して聴いてみたい」という要望も多々ございます。

今回の音源も友人のレコーディングエンジニア(村上輝生氏)からRMEの最新型推奨モデルADI-8 QSで試聴してみたいという事で、弊社スタジオにて試聴チェックを行いました。元々は1ビットの5.6MHz、2チャンネルダイレクト録音されたマスタリング音源を176.4KHz/24bit PCMに変換マスタリング済みの音源です(176.4KHz/24bit)。

聴いて驚きました。素晴らしい音です。高品位オーディオをうたい24/96で収録した物はいくつも聴いた事があったのですが別次元です。

後日、すでにリリースされたCDもいただきました。同じマスターから作られたものですが、やはりメディアの元々の容量のせいでしょうか?随分違います。CDもパソコンに取り込んでちゃんと

したD/Aを通して再生すれば驚く程良い音で鳴ってくれるという事で弊社RMEのD/Aをお使いいただいているお客様のご指摘通りだと思います。

お客様の中から、ちゃんとしたハイビットハイサンプリングで再生する良い音源が無いですか?!といった御要望も多数戴いております。「この音、好きだなあ!176.4KHz/24bit盤、出したいですね」と言いましたら、1ビットのままの元データの入ったDVDとSACDの2枚組を出す計画があるとか……。さっそくお願いして176.4KHz/24bitのデータも入れてもらえる事になりました。演奏もすばらしく、PC-Audioのクラシックファンの方々にもきっとお楽しみいただけると自負しております。

こういった手法で録音されたデータが多数販売されるようになると良いですね。

RMEのD/Aに関する技術的な詳しい解説は以下のホームページにも載せてありますのでぜひご一読ください。

<http://www.synthax.jp/products-overview.html>

なお、何故192じゃなくて176.4なのか伺ったところ、本来がCDのマスタリング用に変換したのでCDの44.1のちょうど4倍、整数倍の方がデジタル的にマスターを作成するのに音が良いそうです。

MURAI Seiji
株式会社シンタックスジャパン

デジタルオーディオ 過去から未来へ

1980年代初頭にデビューしたCompact Disc Digital Audio、いわゆるCDは、たいへん緻密に設計されたメディアです。開発者たちは当時利用可能だったハイテクを駆使し、一般向けプレイヤーに搭載できる物量の範囲で最高のパフォーマンスを得ることに成功しました。CDの発明は録音の歴史をCD以前・以後に分かつ画期的な出来事だったのです。以後30年近くが経過してもCDは録音出版のスタンダードであり続け、多くの人々の耳を楽しませています。

デジタルオーディオ技術の発明は、マイクにより電気信号に変換された音響を解析し、符号化して記録することを可能にしました。これにより、録音の歴史上初めて、入力・記録・出力の関係が厳格に定義されるようになったのです。CDが安定的に一定のパフォーマンスを発揮できるのもこの仕組みのおかげです。

しかし、CDの情報の解像度が不足しているかも知れないと感じる人が年々増えてきました。事実、スタジオではCD解像度で録音が行われることはほとんどありません。これは最近のデジタルオーディオ技術の発展によりCD解像度を越える処理能力を持つ録音装置が容易に手に入るようになったこともありますが、なにより、CDで出版する音響の編集ミックスをCD解像度

で行うと、満足な結果が得られないことが広く知られるようになったからです。

こうして、録音はCDを超える解像度で行い、編集やミックスを経て、最終段階でCD解像度に調整するという作業が一般的に行われるようになりました。これによりCDに収録される音響の水準は一層押し上げられましたが、同時にジレンマを引き起こすことになりました。

「ミックスのときに聴いていた音はあんなに生き生きとしていたのに…なぜ？」CDのプレスマスターのプレイバック中、こんな言葉がどれほど繰り返されたことでしょう。つまり、CDで表現できる音響と、制作過程での超CD解像度の音響とが乖離し始めてしまったのです。CDではCDの範囲の音しか出ない - これがCDに始まるデジタルオーディオの時代の新たな課題となりました。

とにかくいい音を聴いてもらいたい、これはミュージシャンから技術者まで、音楽音響に携わる全員が持っている共通の思いです。よりいい音を求めて、技術の側面からは次世代CDについて既にさまざまな提案がなされています。それはCD技術をベースに解像度の深化と多チャンネル化などの機能を付け加えたDVD-Audio(音楽再生用DVD)や、CD技術の基本であった符号化そのものを見直したSACDなどですが、さらに現代のパーソナルコンピュータやネットワーク技術の応用も考案され、録音出版の方法論

が一挙に多彩になったことは録音の歴史の新たな革命といえるでしょう。

聴き手それぞれが「好みの音」「聴きやすいスタイル」を選択できる時代が始まりました。このアルバムには北村憲昭指揮スロバキアフィルの気品ある上質な演奏を、様々な形式で収録しています。

このアルバムを手にとったそれぞれの方が再生の方法に工夫を凝らし、再生される高解像度の音響と素晴らしい音楽に触れる喜びを満喫されることを期待しています。

相川宏達 Hiromichi Aikawa
aiQualia Co Ltd

録音音源：今回は計2種の音源が存在する。

- 1、スロバキアラジオのスタッフによる従来方式(24bitサンプリング)により録音された物。
- 2、最後の通し演奏を日本の技術者(村上輝生氏)によって最新の機器(KORG社製の1bit録音機)で録音された物。(当アルバムはこちら)

曲目解説

《田園交響曲》作品68 (1808年作曲)

《田園交響曲》作曲の動機はよくわかっていない。しかしベートーヴェンはその生涯を通じて、田舎を訪れて自然に触れることが大好きだったことが知られているから、「田園地方の自然と人々の生活」をテーマに交響曲を書くことは、彼にとってはごく自然なことではあったのだろう。その《田園》だが、ベートーヴェンの作品の中では、実はかなりの異色作である。まず全5楽章という構成は、別に彼が史上初というわけではないが、基本的にハイドンとモーツァルトの確立した規範に則って作られた「ベートーヴェンの9曲」の中では、《田園》が唯一の例外だ。各楽章に具体的なタイトルが付けられているのも《田園》のみ。そして何より、音楽そのものが、彼の他の多くの作品とは違って、まるで「ドラマチック」ではない。つまり、《英雄》、《運命》などで聴かれるような、対立・葛藤・闘争・発展といった要素が、《田園》にはほとんど現れないのである。このため、他の「ベートーヴェンの曲」と同じような感覚で《田園》を聴くと、とんだ肩透かしを食うことになる。最初から最後まで、聴き手を驚かすような事件はほとんど何も起こらず、ただ時間がゆっくりと過ぎていく——「ベートーヴェンにしては、退屈な曲」とすら思

えるかもしれない。

だが、このドラマチック「ではない」という特徴は、必要なものの不足ではなく、題材にあわせて積極的に盛り込まれた特長として受け取るべきものである。つまり、《田園交響曲》の題材である「田園」は、彼が他の多くの作品で展開してみせたような、対立・葛藤・闘争を通じて自らの目的を実現していく「ドラマチック」な世界、たとえば、私たちが普段生活している都市の人間社会「ではない」。「田園」は、人の心に激しい緊張を強いる物事からは「解放された」別世界なのだ。《田園》を聴くことで、人は、そのような「別世界」があることを（あらためて）知らされるのである。

この「別世界」を音楽で表現するために選ばれているのが、「パストラーレ」のスタイルを使って交響曲を書く、という手法である（《田園交響曲》の原題はまさにイタリア語で《シンフォニア・パストラーレ》という）。「パストラーレ」は、キリスト降誕の夜に奏でられた羊飼いたちの笛をモチーフとした音楽、あるいはそういった宗教的な文脈に限られない、いわゆる「牧歌的情景」を表現した音楽の呼び名で、具体的には、6/8（あるいは12/8）拍子でゆったりとスイングするリズム、バグパイプ等を模したバスの長い持続音、同じリズムや身振りの繰り返しなどの音楽的特徴を持ち、さらに、小川のせせらぎ、

鳥の声、アルペンホルンの旋律など、田園地方の自然と人々の生活の描写が織り込まれる。《田園交響曲》を聴いて、まず耳をとらえるのは、まさにこれら多彩な素材を使って描き出される「音の風景画」のみごとさだ。《田園交響曲》の聴き手は、ベートーヴェンの案内で、都会の喧騒を遠く離れ、田園地方の「音の風景」の中を旅するのである。

ところで、《田園交響曲》の正式なタイトルには、ベートーヴェンによって、「音による絵画というよりはむしろ、感情の表現」という注記が付されている。これはつまり、「音の風景画」そのものではなく、そういった音を通じて、「田舎を訪れた人が感じることを伝えたい、ということである。自然を愛するベートーヴェンは、田舎に到着した解放感に浸り（第1楽章）、まだかすかに聞こえていたであろう耳に届く鳥の声や「森のささやき」を愛で（第2楽章）、農民たちの歌や踊りを眺めて楽しみ、嵐の時に自然が垣間見せる恐るべき力に戦慄し、そして一日の終わりには、牧人のホルンを聴きながら、造物主に感謝を捧げる（第3～5楽章）。「ここは本当に素晴らしい。あなたもそうは思わないか？」——ベートーヴェンは、彼にしては珍しい穏やかな口調でもって、聴き手に語りかけてくる。

《田園交響曲》を聴くことで得られる喜びは、風や木々、鳥や虫の発する、かすかな、しかし多

彩な物音に、じっと耳を傾けることで得られる穏やかな幸福感に、よく似ている。「《田園》は退屈」と思ったことのある人には、「コンサートホールへ森林浴に」という感覚で、ベートーヴェンの待つ「田舎」を再訪することを、ぜひおすすめしたい。

悲劇『エグモント』のための音楽 作品84より 〈序曲〉（1809～10年作曲）

悲劇『エグモント』は、ドイツの文豪ゲーテの戯曲。16世紀後半のフランドルを舞台に、スペイン絶対王政の強圧的支配に抵抗して殺された民衆のヒーロー、エグモント伯爵の生き様を描いている。この戯曲のウィーンでの上演に際して、上演に必要な音楽の提供を依頼されたベートーヴェンは、文豪への敬愛と、自由・平和・民衆の解放といったこの劇のテーマへの共感に動かされ、意欲的に作曲に取り組んだという。全曲の冒頭を飾る〈序曲〉では、暗い焦燥感に満ちた響きを基調に据え、スペインに由来する古典舞曲サラバンドの性格を持つ剛直な旋律を、導入部分をはじめとする要所要所に配することで、純粹で勇敢な愛すべき主人公が敵の陰謀によって悲劇的な死に迫いやられるという筋書きが、迫真の筆致で表現されている。だが、エグモントの死は無駄にはならない。〈序曲〉の最後に置かれているのは、劇の結末でも演奏され

る「勝利の交響曲」。曲の最後になって全く新しい楽想を登場させるという破格の展開だが、これによって、志を受け継いだ人々による勝利——自由で平和な世界の実現——が、将来に向けて約束されるのである。

(白石 奏人)

使用楽譜：

BÄRENREITER URTEXT TP906

(交響曲第6番「田園」へ長調作品68)

BREITKOPF & HÄRTEL URTEXT Nr. 14640

(序曲「エグモント」作品84)

プロフィール

スロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団

The Slovak Philharmonic Orchestra

第2次世界大戦後の1949年、チェコスロヴァキア(当時)の東部スロヴァキア地方の首都で、オーストリアと国境を接するドナウ河畔の街、ブラティスラヴァに創立された、スロヴァキア最初の国立オーケストラ。初代首席指揮者は、チェコの伝説的な名指揮者ヴァーツラフ・ターリヒ。このオーケストラの設立に尽力し、1949年の発足時から1952年まで首席指揮者を務め、1961年に亡くなるまでこのオーケストラへの指揮を重ね、短期間で第一級の水準に育成した。晩年のターリヒを補佐する形で、スロヴァキア出身のルドヴィ

ート・ライテルが発足時から1976年まで指揮者を務めた。ターリヒの没した1961年からは、彼の愛弟子でブラティスラヴァ出身の名指揮者、ラディスラフ・スロヴァークが首席指揮者に就任。在任期間中の1980年には初来日を果たしている。「ブラハの春」音楽祭、「ブラハの秋」音楽祭(チェコ)、ブラティスラヴァ音楽祭(スロヴァキア)、ウィーン芸術週間、ウィーン・モデルン、リンツ・ブルックナー音楽祭(オーストリア)、ベルリン音楽祭(ドイツ)、フィレンツェ五月祭(イタリア)といった著名国際的音楽祭への参加も多く、日本や全米、全欧への演奏旅行も頻繁に行っている。レコーディングも多く、スブラフォン(チェコ)、オーバス(スロヴァキア)、ナクソス(香港)といったレーベルから多数のディスクをリリースしている。チェコを代表するオーケストラがブラハのチェコ・フィルであれば、スロヴァキアでこれに匹敵するのがブラティスラヴァのスロヴァキア・フィルである。1980年の初来日以来、卓越したアンサンブルと力強い演奏、民族的な色彩感で高い評価を得ており、日本でも多数のファンを獲得している。

<http://www.filharm.sk/>

北村憲昭 指揮者

Noriaki KITAMURA conductor

1949年12月12日神戸に生まれる。父はアマチュアコーラスの指揮者、父方の伯父は1988

年に亡くなるまでニューヨークで指揮を、母方の伯父もやはり大阪音楽大学の指揮科の名誉教授という一家の中で育った。12才よりフルートを習いはじめ、京都市立芸術大学に入学、吉田雅夫 伊藤公一 各師に師事。大学卒業後指揮を日本の指揮者の第一人者山田一雄氏に師事し指揮法を学ぶ。その後師のアシスタントを務めながら日本では数少ないオペラの経験を朝比奈隆氏のもとで積み、関西歌劇団指揮者として数多くのオペラのレパートリーを身に付けた。1981年ストラヴィンスキーの「エディプス王」を指揮し、デビューを果たす。1991年桂三枝氏の演出によるモーツァルトの「魔笛」の公演で「斬新な演出にも劣らぬ伝統的かつ格調高い指揮であった。」と高く評された。1994年チェコのオロモウツで開かれた国立モラヴィアフィルハーモニー主催のマスタークラスに於いて、シューマンの「交響曲第四番ニ短調」の演奏に、最高の解釈であったとの特別表彰を受け、その榮譽として当オーケストラとシューマン交響曲第一番と第四番のCD録音を行う。

論文「演奏の解析法」「旋律要素の解析」を執筆。著書に「音楽のマニュアル」「演奏のマニュアル」「合奏のマニュアル」「読譜のマニュアル」などがあり、これらは指揮者のホームページで見ることが出来る。

<http://homepage1.nifty.com/nma-yc/>

最高の音質で演奏をお聴き頂ける喜び

今回の録音は当初、現地専門家のみで行う予定でしたが、言葉も慣習も勝手の判らないスロバキアでの録音であり、保険として日本人のエンジニアにも御同行願う事になりました。

色々な方にお伺いしたところ、ROCK系のエンジニアだが1bitの高品位な録音機にもProToolsにも詳しく、海外経験も豊富なTOTO（アメリカのロックバンド）のGOLDDISKも受賞した実績の有る村上氏にお願いする事にしました。実績は有るがまったく譜面を見ない（まさか、もしかして読めない？）ROCK系のエンジニアと本場のクラシック専門のエンジニアの対決は企画として充分面白いと思いましたので。

まるまる2日間のレコーディング、どのテイクを選ぶか何処でEDITするか、どういう音創りにするかはすべて二人のエンジニアまかせという事に。結果を聴いてとても驚きました！「こんなにも違うの？」選んだテイクもテンポも音も響きも全く違う。

結局今回のリリースを村上氏バージョンにしたのは、譜面は全く見ないのに演奏がまずかった処はボツ、私の好みのテンポや響き、アンサンブルのよかったテイクを選んであるからです。

ちなみにクラシックの世界でも最近ではマルチトラックでProToolsを使用した収録が普通ですが、今回は2CH一発録音、その場でミックスし

たまま高品位な1bitレコーダーに録音してもらったバージョンです。

CDは1/44100秒毎に音を切り取ってデジタルデータとして記録しますが、今回使用した録音機はその128倍のスピード、1/5600000秒毎に音を切り取るそうです。驚異的な時間分解能は一度聴いてしまうとその凄さに驚き、虜になってしまいました。そのままリリースしたい衝動に駆られましたが、これは将来なんとか出来ればという事にして、極力この感動のままCDという従来のメディアに押し込めてもらう為、マスタリングまで村上氏にお願いしました。

ところが何と、今回これをリリースできる事に成ったのです。それも、SACDと、PCM (176.4KHz /24bit) それにII楽章とエグモントの1bitデータまでつけての豪華盤でなのです。特等席でその場の生音を一番知っている指揮者として大満足。

こんなアルバム世界中捜しても他に無いですよ！って自慢したくなっています。

この企画にご賛同いただいた、株式会社シンタックスジャパン村井清二様、アイ・クオリア相川宏達様に、感謝申し上げます。改めてスロバキア・フィルハーモニーのメンバー、マネージャーのMs. Tatiana Schoeferovaと、Mr. Pavel Hruby、通訳のMs. Kinga Valentに感謝を述べます。又録音に際しご尽力いただいた、スロバキア・ラジオのMr. Hubert Geschwandtner、Mr. Emil Niznansky、何よりこのプロジェクトを進めてく

ださった村上輝生様に深く御礼を申し上げます。さらにNKBの久木田光明監事、北川啓微理事、水原琢秀副理事長に感謝を捧げます。

北村 憲昭 指揮者
一般社団法人NKB代表理事



HR
Hyper-Resolution

NKB
Record

aiQalia RME